

カルーアハッピーライフ1 —サンプル—

★男体妊娠・嘔吐・産科での診察台・産科での射精（試験管）
妊娠前〜妊娠判明まで

（あれ……なんか怠いな……）

風邪だろうか。十一月に入り、少しずつ冷え込むようになってきた。それでも以前のように勤めに出て
いるわけではないのでウイルスはもらいにくいと思っていたけれど——いや、だからこそ油断したのかも
しれない。

（とりあえず何か温かいもの……）

身体が重いような感じがする。これから熱が出るのかもしれないと思うとコーヒーはやめておいた方が
よさそうだ。

マグカップに牛乳を注ぎレンジに入れる。少し熱めに設定し、リビングに置かれた加湿器のスイッチを
入れる。午前中に窓を開け放して掃除機を掛けていたままスイッチを入れ忘れていたようだ。

（それから……）

とにかく忙しい篠崎に風邪を移すわけにはいかない。この怠さのまま終わればいいけれど、果たしてど
うなるか。

（前は風邪も引かなかったのにな……）

そう思うと体調不良も悪くない、と思えてしまうから不思議だ。だって一人で生きていた頃はずっと気
を張っていた。自分が倒れても、面倒を見てくれる人なんていない。体調不良、特にインフルエンザにで
もなれば言葉の通り死活問題に発展するところだったのだ。

けれど今は、篠崎がいる。仕事が忙しいので当然迷惑を掛けるわけにはいかないのだけれど、頼れる人
がいると自分の本能が学んだからこそ風邪をひくのだと思えばほわほわした幸せを感じられる。

「あちっ」

少しレンジの時間が長過ぎたらしい。シンクの横、作業台のところにカップを置いてはちみつを垂らす。
それをスプーンで混ぜているとドアが開いた。

「諒」

「篠崎。お疲れ様です。コーヒーですか」

「いや、一段落ついたから諒くんにかまってもらおうかと思ってな」

「ふふ、コーヒー飲みます？」

「諒は何を作ってるんだ？」

「ホットミルクです」

「どうした、具合が悪いのか」

篠崎が大腿でこちらに歩いてくる。心配性。それがすごく嬉しい。

「ちよっと甘いものが飲みたいなと思ってはちみつを入れていたんです。篠崎も飲みますか」

ちよっと怠いだけならわざわざ言う程でもないだろう。咳や鼻水が出るとまずいけれど、今は特に風邪

の症状もない。

「そうか、ならないが……本当に具合が悪いわけじゃないんだな？」

くすぐったい。こんな風に心配してもらえるなんて。

「大丈夫です。ありがとうございます」

たまにココアを飲むことだってあるのに。それとも篠崎の中でホットミルクは病人のイメージなのだろうか。

「俺はコーヒーを飲もうかな。自分でするよ」

「やりますよ」

篠崎は仕事をしているのだ。対して安西は家のことしかしていない。確かに家事炊事は真面目にやればそれなりに仕事量が多いけれど、今までずっと一人暮らしをしていたことを考えれば、家事だけというのはそれほど大きな負担でもない。

「だが冷めてしまうよ。飲んでいるといい」

そう言って篠崎は自分でコーヒー豆を取り出した。慣れた動作。今まで安西が会社勤めをしていた頃は自分でしていたからだろう。

「じゃあお言葉に甘えて」

カップを持ってソファに座る。けれどせっかく篠崎が近くにいたので。飲むよりも篠崎の姿を見ていた。

「諒、何か食べるか」

「いえ、お腹空いていないので」

恐らく篠崎は小腹が空いたのだろう。お菓子の棚をごそごと弄っている。

「あ、篠崎の好きなスナックがありますよ」

以前、輸入雑貨店で見つけた篠崎の好きなお菓子。日本のスーパーでは売っていないので、たまに足を運んでたくさん買って置いてあるのだ。

「ああ、あった。ありがとう」

普段篠崎はお菓子をほとんど食べないのだけれど、これだけは別だ。篠崎が好きなものを家に置いておける環境が嬉しい。

(前だったら週末しか行けなかったもんな……)

けれど今なら好きなときに行ける。また後で在庫の確認をしておこう。

「少し疲れてるか？」

「え？」

スナックとコーヒー。ちょっと不思議な組み合わせのように思うけれど米国出身の篠崎には気にならないのかもしれない。

「顔色が悪いような気がする」

「そうですね。特に何もありませんけど」

身体は怠いけれど、ちょっと怠いな、という程度だ。会社勤めしていた頃は毎朝感じていた程度の。だからその程度の怠さが顔色に変化をもたらすとは思えなかった。

けれど篠崎は、安西の顔をじっと見つめた。

「それ、飲み終わったらベッドに入ろう」

「え……平気ですよ」

少し休んだら夕食作りの時間だ。もし必要なものがあれば買い物にだって出なければならぬ。

「ダメだよ。やはり顔色が悪い。体調不良は本当に感じていないのか」

真剣な目で見つめられると嘘は吐けなかった。

「ほんとにはちよつと……怠いなんて思うんですけど」

「諒！」

「や、本当にちよつとなんです。もしかしたら風邪のひき始めかな？　と思うくらいで、顔色に表れるほ

どの体調不良は本当じゃないんです」

言い訳がましかつただろうか。けれど本当のことだ。栄養ドリンクを飲めば忘れられる程度の怠さ。

「……ダメだ。病院へとまでは言わないが、飲んだらベッドに行くよ」

「……分かりました」

篠崎の判断には従いたい。だって心配してくれていると分かっているから。

「いいこだ。じゃあ少しだけ仕事をしてくるよ。十分で戻る」

寝かしつけてくれる気だ、とすぐに分かった。

「あ、いえ、」

仕事の中なのに。経営者なのだから融通も利くかもしれないが、それは時と場合に寄るだろう。仕事に安

西の関係を持ち込む必要はない。

「ダメだよ。俺が心配なんだ。傍にいたい」

「篠崎……」

ホットミルクを飲んでいただけ。篠崎から見たらちよつと顔色が違って見えただけ。少し身体が怠いだけ。それなのに傍にいたい、なんて。

「……恥ずかしい……」

でもすごく嬉しい。

「お待たせ」

篠崎は十分も掛からずにリビングに戻ってきた。データを保存したのか、どこかに電話を掛けたのか、その程度で席を外してしまっているのだろうか。パソコンで会議をしていることだってあるようなのに。

「諒？」

「あの、僕本当に大丈夫ですから」

飲み終えたカップはもう流しに置いた。洗おうかと思ったけれど、体調を意識したせいなのか篠崎に心配されて嬉しいと思ってしまったせいなのか身体がさつきより怠く感じられたのだ。

けれどそんなこと篠崎には言えない。仕事があるから。どういう仕事をしているのかは詳しくは分からないけれど、自分一人で完結する仕事なんて世の中にはほとんどないだろう。篠崎が安西のせいで誰かに謝罪するようなことになるのは嫌だった。

「諒。ダメだよ。ほらベッドに行こうな」

目も、声も、全てが優しい。

「……はい……」

逆らうなんて、できない。

「吐き気は？」

「ないです」

「熱を測ろうか」

ベッドに横になり、布団を肩までしっかりと掛けられる。篠崎は手でも体温を確認したけれど、それでも心配だからと言って体温計を取り出した。

「腕を」

体温計を脇に挟むくらい自分でできるのに。でも甘えたいと思ってしまう。

「ん……」

「いいこだ」

腕も篠崎が押さえてくれた。何から何まで——嬉しい。

「……微熱があるな」

「え」

ピピ、という電子音の後、篠崎が温度を読み上げた。三十七度二分。体温が高い人にとっては平熱。普通の人には微熱、という程度。

「本当に風邪のひき始めかもしれないな。寒気はないか」

「大丈夫です」

本当に大丈夫だった。微熱があると言われて驚いてしまったくらい。

「他に何か不調は？」

「何もないんですけど……」

身体が怠いのと、微熱だけ。喉の痛みも鼻水も悪寒も頭痛も、何一つない。

「疲れかな」

「疲れるような生活していませんよ」

「家事は大変だろう」

「そんなことないですよ。今までは家事しながら仕事に行っていたんですから」

「それはそうだが……退職してから俺も甘えっぱなしになってしまっていたからな」

「そんなの甘えてって言いません。今は家事が僕の仕事ですから」

退職前は、週末に二人でスーパーに買い物に行ったり掃除をしたり。なんだかんだと家事を一緒にすることも多かったけれど退職後は当然ほとんどのことを安西一人で担っている。でも仕事に行っていないのだから当然だし、責任感という意味ではかなり楽な生活をさせてもらっている。

「セックスのし過ぎかな」

「なっ……っ……」

なんて恥ずかしいことを――。

「だが最近回数も多かったし、疲れているだろう」

「やっ……やだ……」

恥ずかしい。そんなことを言われたら余計に体温が上がってしまう。

「大丈夫か」

「大丈夫じゃないです……」

確かに最近セックスの回数は多かった。寒くなってきたせいか人肌恋しくて、つい篠崎に甘えてしまっていたのだ。そこからなんだかんだと発展して、セックスをして――。

「諒くんが可愛すぎてな。すまない」

「可愛くないです……それにその、えっちは……僕もしたかったから」

なぜかは分からないけれど、このところ性欲が少し強かったように思う。ほんの少しだけ。

「可愛いな……早く元気になってくれ」

「したい？」

「いつでもしたい」

「ふふ」

今でもしてくれていいのに、と思ってしまう。体温が高いから、もしかしたら中も熱くなっているかも、なんて。

（そんなこと、前は考えもしなかったのにな……）

篠崎は本当に安西のことをガラリと変えたな、と思う。勃起すらできなかったのに勃起ができるようになり、射精もできるようになった。それらを克服させてくれて、さらに自らしたいとまで思えるようになってくれた。

「あ……」

「ん？」

「や、何でもないです……」

最近性欲が強いと感じたのはもしかしたら若い頃にずっと性欲が抑制されていた反動なのかもしれない。大好きな篠崎に丁寧に可愛がられる喜びを知って、過去の分まで取り返そうとしているのかもしれない。

「諒？」

「いえ……その、元気になったらまた、その……」

「ああ。諒が出なくなるまでしような」

「やっ！ それはちよつと……」

篠崎のセックスは優しいのにきつい。気持ち良すぎて何度も何度もイってしまうからだ。そして篠崎も優しいからいきそうになれば素直にイかせてくれるので、何も出なくなるまでずっと気持ち良くさせてしまおう。

「さあ諒、少し寝ような」

「篠崎、仕事は？」

「大丈夫だ。諒がつらいときに一緒にいられないのなら家で仕事をする意味がないだろう」

「もう……」

嬉しい。篠崎はいつだってストレートな言葉をくれるから。未だに「愛してる」は慣れないけれど、それでも少しづつ照れずに聞けるようになってきたような気はしている。それはとても幸せなことだ。

「さあ、目を閉じて。怖くないよ」

「うん……」

ああそうだ。克服させてもらったのは勃起だけじゃない。こうして寝ることも教えてもらった。一人で眠れるようにはなってきたけれど、やはりまだこうして寝かしててもらった方がゆっくり眠れる。

「いいこだ。怖かったらまだ目を開けてもいいよ」

「ん……」

安西が寝たら仕事ができるのに、篠崎は急かそうとはしない。優しい。

「篠崎」

「ん？」

「……呼んただけです」

篠崎の意識が安西に向いていることなんて確かめなくても分かっているのに、今向けてくれている以上の意識を向けてほしかった。

「可愛い悪戯だ」

「悪戯じゃ……」

でも悪戯、かもしれない。悪ふざけとは違う。ちよっかい、だろうか。

「眠くないなら何か話そうか」

「けど」

篠崎には仕事がある。そう思うのに、篠崎はそんなことを決して匂わせない。

「次に行く旅行の話とか」

「えっ」

「旅行、どこか行きたいだろう」

「でも……」

旅行は前に京都に行ったきりだ。でも今はこうして毎日一緒にいられている。それだけで十分だ。

「ずっと家では退屈だろう。たまには外に出よう」

でも篠崎の仕事が気になる。いいのだろうか。

「俺は行先にこだわりのないんだが、諒くんが行きたいところに行きたい」

「……広島に妖怪博物館があるらしいです」

「そうなのか」

声のトーンが少し上がった。

「ふふ、本当に妖怪好きですね」

「怖いかな」

「怖くないです」

篠崎は妖怪が好きだけれど、怖いものを部屋に置いたりはしない。置いてもいいとは言っているのだけ

れど、安西が怖がるからと遠慮してくれているのだ。

「篠崎と一緒にいてくれるから怖くないです。もし人形が動き出したりしたら、篠崎が守ってくれるでしょう。」

前は現実的な話ばかりをしていた。こんな非現実的な話なんて全然。だって時間がなかったのだ。仕事と家事に追われ、二人で過ごせる時間は限られていた。静かに手を繋いだり、篠崎がお酒を飲むのを横で付き合ったり。そんな時間が多かった。それはそれでとても幸せだったけれど、時間が足りないと感じていた。

「もちろんんだ。でもやはり、そんなことが起きるような事態は避けたいな」

「もう……」

冗談の話なのに、篠崎はやはり安西を守ろうとする。恥ずかしくて嬉しくてくすぐったい。

「ストレスかもしれないな」

「え？」

「仕事を辞めさせてしまったから」

「そんな……」

それは自分で決めたことだ。確かにそれを最初に望んだのは篠崎だけれど、安西自身が篠崎の希望を叶えたいと思ったのだ。それにたくさん一緒にいられて嬉しい。以前は作り置きだった昼食だって作ってあげられるし、夕食だって篠崎に任せてしまうこともない。

「僕が篠崎と一緒にいたかったです！」

「そうか。嬉しいよ」

~~~~~

「リンゴジュースも飲んでみようか。水よりはカロリーがあるし」

「はい。ありがとうございます。すみません、ちよつと顔を洗ってきます」

朝食は篠崎に甘えることにしてトイレに行き、それから洗面所で顔を洗った。それから歯ブラシ。普段から朝食の前にはマウスウォッシュを使うのだけれど、今日はなんだか普段より口内が気持ち悪くて。だからと歯ブラシに歯磨き粉をつけて口に含んだ瞬間だった。

「うううっ！」

一気に吐き気が込み上げた。気持ち悪い。洗面所で吐くべきではない。そう分かっているのに勝手に腹が凹むほど衝撃の強い嘔吐だった。

「うええええっ」

「諒？！」

洗面所のドアが開いていたから聞こえたのかもしれない。篠崎が走って来て背中を撫でてくれる。

「大丈夫か。気にせず吐きなさい」

そう言われるけれど昨日の昼食以降何も食べていない身体には吐くものがなかった。眠ってばかりで水分も取っていないなかったので、吐き出すものがないまま胃が攀じれる感覚に耐える。

「うううええええ！」

「諒……」

出てくるのは黄色い胃液。口の中が苦い。苦しみで涙と鼻水が垂れる。吐けたら楽なのに、吐くものがないせいで余計につらい。

「諒……」

胃液が出尽くしたのか、今度は緑色の液体が出てきた。気持ち悪い。何なのだ、これは。

「やっ！」

「諒、大丈夫、胃の奥の臓器から出ているだけだ。大丈夫、怖くない」

「ううえええ！」

腹が凹む。胃が攀じれる。苦しい。なのに止まらない。

「諒、落ち着いたら病院に行こうな。大丈夫、ゆっくり息をしてごらん」

嘔吐が治まって一瞬の隙に篠崎が言った。背中を撫でる手に合わせてゆっくりと息を吸い、嘔吐しないようにと願いながら息を吐き出す。

「そう、上手だよ。いいこだ。そのままゆっくり呼吸してみようか」

苦しいのに、篠崎の声を聞くと安心できる。少しずつ、ゆっくりゆっくり息をすると次第に呼吸が落ちていく。

「諒、大丈夫か」

「はい……」

胃液で喉がやられて声がガラガラだ。それに鼻水も垂れ流し、鼻声。幸い固形物はなかったので水を流し、手で水を溜めて口を漱ぐ。

「ほら」

渡されたティッシュ。一先ず鼻をかんで顔を洗った。

「つらかったな」

「ん……びっくりした……」

「吐き気があったのか。気付かなくてすまない」

「えっ、あ、いえ、違うんです。吐き気なんてなかったんですよ」

「え？」

篠崎はお粥を作ったことを詫びているようだった。けれどあるとき、食欲不振ではあったけれど吐き気はなかった。

「口の中が気持ち悪かったので歯ブラシをしようとして、歯ブラシを口に入れたら急に……すごくびっくりしました……」

まだ胃には不快感が残っている。けれどとりあえずは一旦落ち着いたようだ。

「あ」

そう言えば歯ブラシはどうしたんだっけ、と床を見ると無残にも落ちた衝撃で歯磨き粉が散っていた。

「ああ片付けておくよ。ベッドに戻りなさい」

「……すみません」



「すぐに行くから」

篠崎にお礼を言ってベッドに戻る。まだ体温が残っている布団を掛けて目を閉じた。

(何なんだろう……)

腹痛はないけれど胃腸炎かもしれない。そういえばノロウイルスが、というニュースを観たような覚えがある。どこかのスーパーでもらってきてしまったのか。でももしそうなら篠崎に移ってしまう。洗面所も塩素で綺麗にしなければ。

ベッドを抜け出し洗面所に戻る。篠崎は床に膝をつき歯磨き粉を拭っていた。

「篠崎」

「諒、どうした」

急いで立ち上がってくれるところも好き。けれど今はあまり接触しない方がいいだろう。

「あの、ノロウイルスだったらまずいので、僕やります。すみません。手洗いうがいをしっかりしてくださいませか」

「手洗いうがいはきちんとするよ。だから気にせずベッドにいなさい」

「でも」

「でも、じゃない。ダメだよ諒。横になるのがつらいならクッションを持って行くからベッドに座っていい方がいい」

「……分かりました」

塩素系漂白剤の場所を告げて寝室に戻る。ベッドに入り、横になった。

~~~~~

「熱で普段より敏感なのかな。さあ、身体を起こせるか。背中を拭こう」

話していたから乳首は最後にしていたのだろう——そう思うとタオルで拭かれるだけで感じてしまうことバレていたということさらに恥ずかしい。けれど篠崎はいやらしい雰囲気醸すこともなく一度タオルを洗い、もう一度温度を取り戻したタオルで背中を拭いた。

「さあ、じゃあえっちなおちんちんを拭こうか」

「や……自分でします」

「ダメだよ。諒くんは自分でしたら拭きすぎてしまうかもしれない」

拭きすぎる、とはどういう意味か。痛くなるほど擦ったりはしないけれど。

「清めているふりをして、えっちなことを自分でしてしまうだろう？」

「しのぎきつー！」

今日はなんだか普段よりからかいが過ぎる。恐らく気を紛らわせようとしてくれているのだ、と分かっているけれど、中途半端に煽るのはやめてほしい。したくなくてもきつと今日はしてもらえそうにないから。

「さあ、可愛いおちんちんにご挨拶だ」

「や……可愛くないです……」

サイズや色は違っても形状は同じ——と思いたい。篠崎にもあるものなのに、こうして篠崎はいつも「可愛い」という形容詞を付ける。

「可愛いよ。ああ、勃起してしまったのか。やっぱり諒くんはえっちなかもしれないな」
「うう……」

具合が悪かったはずなのに、今はもう抱かれることしか頭にない。

(ああでも洗浄できない……)

さすがにそこまでする元気はない。でも出したい。篠崎に触らりたい。

「篠崎、して」

「ダメだよ」

「出したい……」

「諒」

「子供の日だから……我儘言っていいでしょ」

「諒」

諭すような呼び方。でも篠崎が言い出したことだ。

「えっちな大人のおねだりです。篠崎のと一緒にごしごしして……」

「まったく……」

仕方ないな、と言いながら篠崎がタオルを洗面器に落とす。そしてベッドに乗り上がり、見下ろされた。

「篠崎……おちんちん……」

「ああ……でも長くはしない。我慢しないですぐにイクんだよ」

「やだ……篠崎と一緒にイきたいです」

「それは……なら少しか我慢してくれ」

どうやっても安西の方がイくのが早い。というか、まあ所謂早漏なのだ。だってすごく気持ちいいから。もつと時間が経てば刺激にも慣れてもう少しイきにくくなるのだろうけれど、性感を知ったばかりの身体はまだまだ敏感でどう気を逸らそうともすぐに射精をしてしまう。

「あ……篠崎の……」

ズボンと下着をずらしただけで飛び出してきたペニス。やはりこうしてみると安西のものとは別物のように見える。

「嬉しい……」

それはちゃんと勃起していた。興奮してくれていたのだと思うと嬉しくなる。

「俺もダメだな。諒くんの可愛いおねだりと勃起を見るとすぐに反応してしまう」

「嬉しいです」

でもそんなの安西に比べたらまだまだだな、と思う。だって安西は平日の昼間、篠崎と一緒にいないときでも篠崎を思い出すだけで勃起してしまうことが多々あるのだ。

正常位のように覆い被さった篠崎が二人のものをまとめて握る。もうそれだけでドキドキしてしまう。だって篠崎の大きくて硬いペニスと触れ合っている。一緒に篠崎が握っている。

「はあん……」

「色っぽいな」

「んっ……ドキドキする」

「俺もだよ。でも少しでも気分が悪くなったら必ず言うんだ」

「はい」

きっとそのときは言うより先に篠崎が気付くだろう。手の感触で。

「あっ」

篠崎が手を動かし始めた。最初はゆっくり、そして安西の表情を窺いながらスピードを速めていく。

「んっ、んっ」

「どうかな」

「だいじょっ、あっ、きもちっ」

胃のむかつきはある。けれどももうそれより快感が勝っている。大丈夫、このまま治る。だってこんなに気持ちいい。

「あっ、いつ、いくっ」

~~~~~

(でも……怖い……)

普通の家庭を知らない。普通の親を知らない。親としての接し方なんて全く分からない。施設のスタッフしか知らない、でもそれは親とは違うということは分かっている。

(どうしたらいいの……)

「助けてゆうくん……」

でも当然、ゆうくんは何も言ってはくれない。もし生きていたら何とやってきていただろう。いや、ゆうくんが生きていたらきっと篠崎とは知り合っていない。

「ゆうくん……」

優しくかったゆうくん。自分より皆を優先していたゆうくん。責任感があって、とにかく優しくって、いつでも安西を守り、助けてくれたゆうくん。

どうして死んでしまったの。どうして置いていったの。どうして一緒に連れていってくれなかったの――

。涙が溢れる。これまでゆうくんを想ってどれほど泣いただろう。いや、涙が流れなくても心で泣いていた。

「っふっ……ああ……ゆう……」

「諒」

「……え……?」

「諒……」

安西を呼ぶ声。振り返ると篠崎がいた。

「……」

「諒……」

篠崎がゆっくりと歩いてくる。

「ここかな、と思って」

どうしてここにいるのだろうか。朝、買い物に行ってくると出掛けた。そして帰宅も告げずにトイレを使い、そしてここに来た。

一度帰宅したことがバレていたのだろうか。

「や……ごめんなさい……」

どうしよう、と思いつながら後ずさる。

「諒」

「や……やだ、や！ ごめんなさいっ！」

嘘を吐いて家を出たことも。帰宅の際に何も言わなかったことも。妊娠したことも。ゆうくんのお墓に来ていたことも——全て。

「ごめんなさいっ」

「諒、大丈夫、怒ってなんていないよ」

確かに声はいつもと変わらない。けれど、でも。

「やっ」

篠崎が一步步近づいてくる。でも来ないでほしい。

「来ないでっ」

「諒??」

「やだっ、やああ!!」

さっきよりもたぐさんの涙が溢れた。止まらない。でもとにかく来ないでほしい。だって近くに來たら縫ってしまう。助けてと言ってしまったくなる。でもそんなの無責任だ。篠崎に精をねたり、妊娠した。

これがもし男女間なら——そうやって想像すれば事の重大さは明確だ。

「諒、怒ってないよ」

「や！ やだっ!!」

頼りたくない。頼ってはいけない。甘えてはいけない。甘えなくなる。怖い。助けて。

(篠崎……助けて……)

「来ないで……」

踵に何かが当たった。振り返る。他の人の墓だった。

「あ……」

「諒」

ふわ、と香る篠崎の匂い。柔らかい生地が頬に触れる。篠崎の愛用しているマフラーだった。

「諒」

「やあああ!!」

~~~~~

「では、次の検査ですが、この試験管に射精してもらって、安西さんの精子の状態を調べます」

「え……？」

精子、と言ったのか。試験管に射精、と。

確かに医師は理科の授業で見たような試験管を持っている。けれどそれに射精……？

「過去の妊夫さんの話ですが——まだ全く症例のない頃の話です。妊夫さんが妊娠期間を終えられ——あ、無事に出産されたんですけどね、その後で精液が出なくなってしまうということがあったんですよ」

「出なく、ですか」

篠崎が安西の代わりに声を出した。

「はい。その後他の妊夫さんで調べたところ、どうやら妊娠中は妊夫さんの精子の動きが鈍くなるようです。そのメカニズムや理由はまだ分かりませんが、恐らくホルモンが胎児を育てる方に力を入れているからではないかと考えています」

医師の説明は分かりやすかった。

妊娠すると、造精自体は変わらず行われているのに、なぜか精子の動きが止まり妊娠させる力がなくなってしまう。

しかしその間も射精を続けさせないと、身体が男性としての機能を忘れてしまい、造精機能の停止、また精液の成分である精漿《せいしよう》さえも分泌を止めてしまう。

「しかし問題なのは、妊夫さんは性欲がなくなってしまうことです」

「なくなる、ですか」

「はい。個人差があるだろうとお思いでしょうが、少なくとも私が診てきた妊夫さん全員の性欲がなくなりました」

「それは羞恥からそう言っているだけでは」

「私もそれを疑いましたが、ここは病院で私は医師です。患者さんとその胎児を守るためには必要なことは全てお伝えするし、全力を尽くします。そのことは皆さんにお伝えしているので嘘はないと思います。

というか、妊娠中の射精が必要だと分かった後に診た患者さんからは性欲がなくて射精することがつらいという相談を受けていますので」

「失礼しました」

篠崎がきつちりと頭を下げた失礼な発言だったと詫げる。

「ああ、いえ、いいんです。男性が急に性欲をなくす、なんて私たちには全く理解ができません。ですからね。でも事実です。性欲がないまま射精を強要される——しかもお腹は大きくて日常生活も今まで通りいかない。外出さえも視線が怖くて自由にすることができない。そんなストレスフルな生活の中での悩みですから」

「諒、大丈夫か」

「あ……はい。……あの、けど、そんなことをして赤ちゃんは大丈夫なんでしょうか」

「女性と違って、子宮と前立腺や精嚢は別の器官として存在しています。女性の場合はオーガズムによって子宮の収縮が生じますが、射精と子宮は別物なので大丈夫ですよ」

そうなのか。なら少し安心できる。ちょっと怖いけれど。

「……分かりました」

「ではこちらをどうぞ。私は他の部屋におりますので、終わられたらその電話の内線二番でお呼びください」

医師が退室しても、さあ射精だと動く気にはなれなかった。

約5万文字です。

男性妊娠・嘔吐・産科での診察台・産科での射精（試験管）があります。1ではエロはほとんどないです。

とにかくずっと安西が体調不良です。

宜しくお願い致します！

ツイッター（ネタバレ・新刊情報・執筆裏話等）

@goneone11